

媒体名	福島民報	版/面	1面・2面	掲載日	2025年7月31日(木)
-----	------	-----	-------	-----	---------------

復興新聞 世界に発信へ

神田外語大 日本語と英語で製作
3年生19人

震災・原発事故 14年

被災地では生活環境の整備や関連施設の建設が進み復興のつち音が響く一方、今なお古里に帰還できない住民がいる。発生から14年が経過し、記憶の風化も懸念される。こうした現状を踏まえ、本県復興と学生の学びをつなげようと企画した。

8月下旬、浜通りで取材

神田外語大(千葉市)の3年生19人は東日本大震災と東京電力福島第1原発事故からの復興状況を国内外に発信しようと、日本語版と英語版の震災復興新聞を作る。8月下旬、浜通りの被災地取材する。

プロジェクトに参加するのは、グローバル・リベラルアーツ学部の柴田真一(特任教授06)のゼミ生。1泊2日の行程で、浪江町の震災遺構「語り小」や誘致企業、研究機関などを訪ねる。福島民報社の社員が取材や新聞製作をサポートする。



取材先の事前学習をする神田外語大の学生と柴田教授(右)

震災復興をテーマにしたオリジナルビルを造る。原E(「エッジ」)、福島市

料選ひから製造、レベルのデザインまで全ての工程に関わる。都内の羽田空港や首都圏情報発信拠点「日本橋ふくしま館M.I.D.E.T」(橋本)、「エッジ」、福島市

の「コッセ」まで販売する予定。同大会開かれる学園祭「浜風祭」(10月26日)では福島応援ブースを設け県産品などを販売する。

柴田教授は「これから海外で活躍する学生に過去、現在、未来の福島を感じてほしい」と話。ゼミ生の山本悠加さん(20)「塙町出身は、卒業後、海外で仕事をしたい。これからは福

島に関わっていくために全力で頑張る」と意気込みでいる。

震災を「自分ごと」に佐野理事長が意気込み



神田外語大の佐野理事長は30日、福島民報社を訪れ、プロジェクトに込めた思いを語った。県外の若者に震災を自

分ごと」に捉えてもらうのが目的で、「いずれ世界で活躍する学生が、自国の一つの側面として震災を語るようになってほしい」と述べた。

神田外語大は、柴田村の英語研修・宿泊施設「フレイッシュヒルズ」を通じている。法人本部グループコミュニケーション部の渡辺次代次長、三上山雄亮さんが同席した。

2025(令和7)年
7月31日
木曜日

発行所 福島民報社
〒960-8602
福島市太田町13-17
電話代表024(531)4111
<https://www.minpo.jp/>
購読のお申し込み0120-373437
読者センター0120-803344



福島民報
オンライン新聞
登録はこちら
購読者は
読み放題です



日本一のふくしまをつくる
本社年間スローガン

神田外語大が復興新聞製作へ②



神田外語大(千葉市)の3年生19人は東日本大震災と東京電力福島第1原発事故からの復興状況を国内外に発信しようと、日本語版と英語版の震災復興新聞を作る。8月下旬、浜通りの被災地取材する。